

## 事業完了報告書（八尾市）

### 調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ～ 令和7年3月14日
調査研究事項	<p>I. 教育課程、教育環境整備に関すること</p> <p>1. 中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 生徒の実情に応じた教育課程の編成について</li> <li>② 教職員のスキルアップや個に応じた教材作成について</li> <li>③ 夜間中学専任スタッフ（通訳・スクールカウンセラー等）の配置による学習指導や生活指導について</li> </ul> <p>2. 不登校経験者向けの支援の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 不登校経験者の生徒の学びの保障について</li> <li>② 進学・生活相談体制の整備について</li> </ul>
調査研究のねらい	<p>1-①</p> <p>本学級には、戦争、貧困等で義務教育が十分に受けられなかった高齢者や帰化した生徒で日本語理解が十分でない生徒、幼少期から海外で生活していたため日本語が話せない生徒が在籍している。特に入学時点では殆ど日本語を話すことができない外国にルーツがある生徒が多く在籍している。そのため、中学校の教育課程の学習の土台となる小学校の教育課程の学習や日本語の習得が必要である。そのため、全生徒を1組～6組に再編成して、1組は読み書き中心、2組は中学校課程の教科指導、3組は日本語指導を入れながら小学校課程の教科指導、4組から6組は日本語指導を中心に授業を行っていく。また、生徒の多くは、年齢や国籍に関わらず、様々な生活上の困難を抱えている。生徒たちが日本社会で安心、安全な生活を営むための「生きる力」を習得し、個に応じた教育課程を充実させることが必要である。校外での学習活動も積極的に取り入れながら、多様な経験の場が必要である。</p> <p>1-②</p> <p>外国にルーツがある生徒が多く、教職員全員で日本語指導を行っている。本学級の生徒には、主に日本での生活に適応していけるような日常的に使う単語等を使った教材が必要である。そのために、教職員全員での日本語指導研修や校内授業研でスキルアップのための校内授業研や、様々な先</p>

	<p>進事例をもとにした教材作成が必要である。</p> <p>1—③ 日本語を母語としない生徒で日本語が習熟できていない生徒が充実した学校生活を送るために、通訳をはじめとするサポート体制の構築が必要である。通訳等のサポーターを活用し、生徒や保護者とのコミュニケーションをより密にし、実際の生活相談をもとに支援し、また教職員間で情報を共有し、生徒の実態に合わせた学習指導・生活指導・進路指導を行う必要がある。</p> <p>2—① 義務教育既卒生で不登校を経験した生徒が増えている。生徒の実態に合わせた指導方法や教材の開発を行う必要がある。</p> <p>2—② 生徒や保護者の抱える悩みを受け止め、学校におけるカウンセリング機能の充実を図るため、臨床心理に専門的な知識・経験を有する学校外の専門家を積極的に活用する必要がある。</p>
調査研究の成果	<p>1. 教育課程に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス編制を認定5クラスから6クラスに再編制し、教員による学習者への対応を強化した。日本語指導を主体とした6組～4組クラスでは、日本語の習得状況に応じて、半期ごとに進級できる体制を整えた。「6組→5組3人」、「5組→4組11人」、「4組→3組3人」と、昨年度より進級者が増加した。次年度初めにも数名の進級が見込まれる。</li> <li>・日本語指導の初歩クラスでは、TTや個別指導を取り入れた。地域の方々や大学生のボランティアによるきめ細かな指導ができた。</li> <li>・高齢のため学校で長い時間の登校が難しい生徒や、家事や残業により早退・遅刻・欠席がある生徒には、教材を工夫し個別対応を行った。</li> <li>・本校で学習してきたことをもとに生徒による作文発表会を春と秋の2回実施している。作文を通じて、生徒の学習状況を確認し、個に応じた教材について教員間で生徒の情報を共有することができた。また、発表会を通じて生徒同士で思いを共有し、他者とのつながりや自己肯定感の醸成につながった。</li> <li>・本校昼間の生徒との交流を行い、相互理解が深まった。</li> </ul> <p>2-1. 外国籍生徒の在留資格や日本語指導等における教職員のスキルアップや個に応じた教材作成について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進学予定者の始業前補習学習では、個別に作成した教材を活用し、日本語理解の向上がみられた。</li> </ul>

- ・ 専門家を招聘し、日本語指導力の向上のため研修を行った。模擬授業や講義を通じて意見交換を行い、指導の方向性や課題の確認ができた。
- ・ 大阪出入国管理局の講師による研修では、在留資格に関する理解が深まり、生活相談や進学・就職について、適切なアドバイスができるようになった。
- ・ 近畿夜間中学校協議会の研修会や全国夜間中学校研究会に参加・発表をし、他校の先進事例の共有や取組みの見直しを行った。
- ・ 校内授業研では、教科指導や日本語指導に関する意見交換を行い、新たな気づきや発見が得られた。

#### 2-2. 特別支援を必要とする生徒の学びの保障のための職員のスキルアップや具体的な指導方法について

- ・ スクールカウンセラーによる「大人の精神疾患」についての研修を実施した。生徒理解が深まり、適切な助言ができるようになった。
- ・ スクールソーシャルワーカーによる研修を実施し、生徒理解に関するアドバイスをもらうことができた。また、スクールソーシャルワーカーを通して他機関との連携を深め、取組みを進めることができた。
- ・ 講師を招き、校内研修（在留資格等）、人権教育研修（在日韓国朝鮮人問題）を実施した。外国籍生徒の在留資格等についての理解や、教職員の人権意識の向上につなげることができ、差別を見抜き許さない学級づくりや共生社会の実現に向けた取組みを進めることができた。

#### 3. 夜間中学校専任スタッフ（通訳・スクールサポーター等）の配置や就学援助制度などによる教育活動における支援のあり方について

- ・ 専任スタッフ（通訳）の配置により、資料の翻訳や行事参加時の通訳、進路説明会や保護者との進路懇談、入学希望者への対応などを円滑に進めることができた。
- ・ 生活保護・就学援助等の申請、検査・検診の間診票記入、病院等への付き添い、府営住宅の申請なども、専任スタッフ（通訳）と連携し対応した。

#### 4. 生徒の実態に合わせた指導方法や教材の開発について

- ・ 廊下に全生徒で作った作品を展示し、自身や他者の頑張りを共有できる環境を整え、生徒の自己肯定感の向上に取り組んだ。
- ・ 本校の昼の生徒との交流として、全校集会で代表生徒の作文発表と本校教職員による説明を行った。「夜間中学についてよく理解できた。」な

どの感想をたくさんもらった。

- ・不登校等により小学校課程が十分でなかった既卒生にむけて、小学校経験者の意見が参考になり、校区交流や小学校での研究発表会にも参加し小学校課程の資料も集めることができた。
- ・個別の進度に応じた教材の作成やICTを活用した学習支援を実施した。

#### 5. 進学・生活相談や不登校経験者支援のための相談体制の整備について

- ・スクールカウンセラーの月1回配置により、生徒も教師も相談しやすい環境が整った。また、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーによる教職員研修を実施し、生徒理解が深まり、安心・安全な学校づくりを進めることができた。
- ・進学予定の生徒には、授業前に補習授業を実施し学力向上をはかるとともに、専任スタッフの通訳のもと保護者、本人と進路懇談を行い、多言語進路ガイダンスや高校見学にも引率するなどきめ細かな支援を行った。
- ・日々の授業前と長期休業中の補習等の学習体制にスクールサポーターや日本語指導支援員を活用し、高校進学に向けて取り組んだ。生徒の不安や心配事を取り除き、出席を助けることにつながった。
- ・日本語理解に不安を抱える生徒に対して、出願手続きのサポートや入試日、発表日、合格者への説明会等に教職員が帯同した。
- ・検尿や結核検診における精密検査等の指導や学校検診における精密検査・特定検診等の病院等への付き添い、国民健康保険の請求や滞納の対応等について市役所・保健所等への相談援助を行った。
- ・府営住宅、市営住宅申し込みの書類の書き方等の援助を行った。
- ・生活保護関連、就学援助関連、通学定期関連の手続き援助を行った。
- ・健康について相談対応を行った。
- ・新たに渡日した生徒の学齢期の子ども、兄弟、姉妹の教育相談等の対応を行った。
- ・夜間学級は学習できる場所である以上に、安心できる居場所であり、なんでも相談に応じてくれる信頼できる教員がいるところであり、生徒にとっては重要なセーフティーネットとなっている。